

三川内焼の歴史

江戸時代が始まる直前から、肥前平戸領において生産された陶磁器は「平戸焼」と称され、明和8年(1771)の平賀源内による建白書にもその名が見られます。

江戸時代後期以降には、平戸焼の主要な生産地が三川内地区(※江戸時代の文献には「三河内」と記載されています。)にあったことから「三河内焼」と呼称されることが多くなり、現在まで、焼物の里の歴史は続いています。

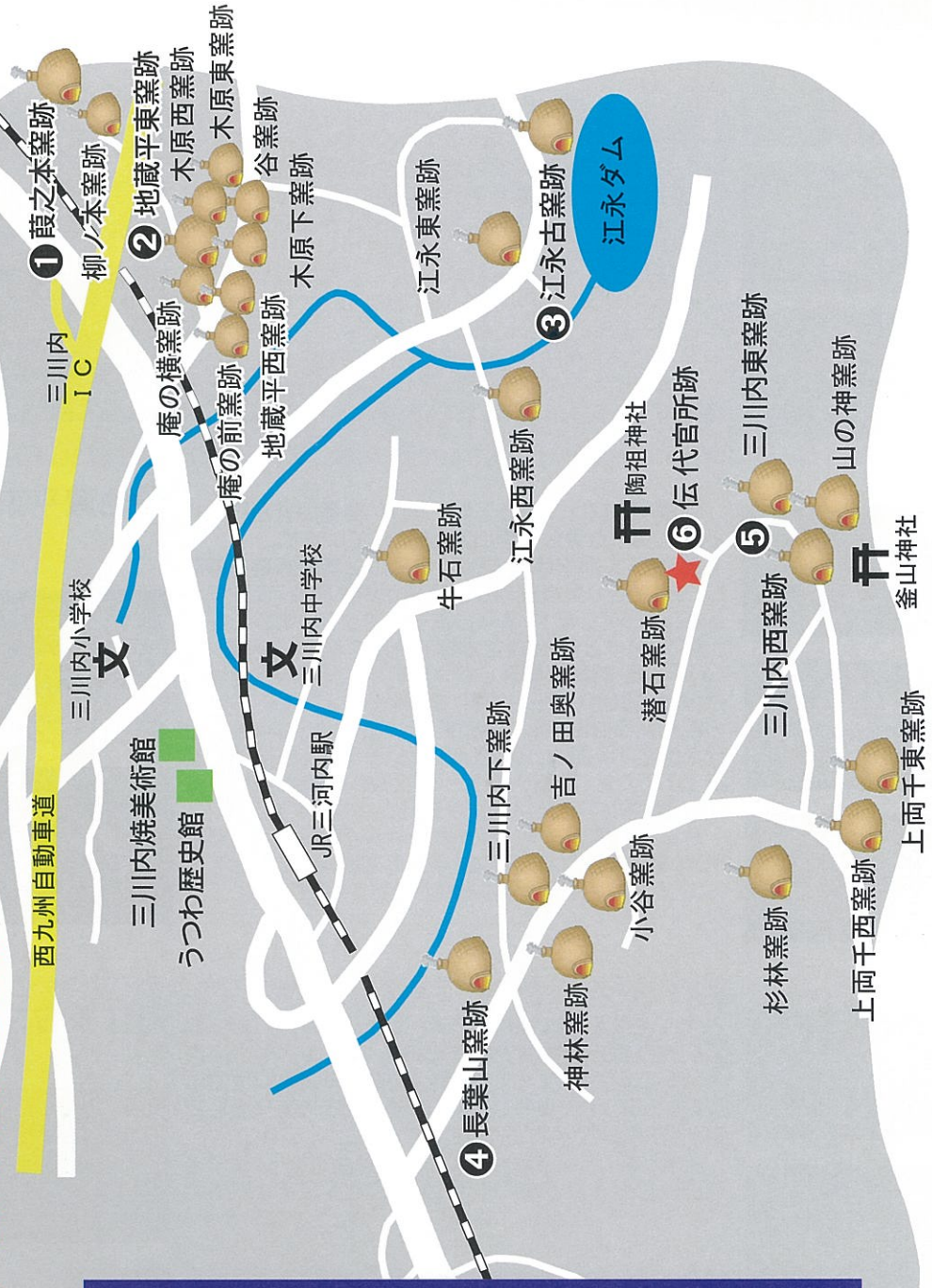
江戸時代の文献で記載される「三河内」(現在の長崎県佐世保市三川内地区)は、木原・江永・三川内の3皿山の総称であり、それぞれに多くの近世窯跡群が確認されています。

近世に生産が開始された平戸焼については、肥前の他地域の窯場と同様、文禄・慶長の役を契機として、平戸藩主松浦鎮信が帰陣の際に連れ帰った陶工らが大きく関与しています。その朝鮮陶工の一人である高麗媼(こうらいばば)は、唐津藩(佐賀県伊万里市)椎ノ峰で製陶に従事したのち三川内地区へ移住し、子の中里茂右衛門とともに長葉山窯の開窯など三川内地区における陶器生産の技術向上に影響を及ぼしました。

また、高麗媼同様、朝鮮陶工である巨関(きょかん)は、平戸藩主松浦鎮信の命により平戸島内に中野窯を開窯し、薄手で繊細な染付を生産しました。さらに、巨関の子の今村三之丞は唐津・有田・波佐見を経て三川内地区へ移住し、「三河内皿山代官」及び「御細工所棟梁」に任命され、三川内地区における磁器生産の確立に努めました。



三川内焼古窯マップ



戦国時代末に始まった三川内焼は、次第に江戸幕府や平戸藩主に献上されるまでに発展していった...

葎之本窯は、昭和56年(1981)に発掘調査を行っており、発見した3基の窯全てで唐津系陶器(=土が原料)を焼成しています。

出土遺物の観察の結果、1590~1630年代の間に1号→2号→3号の順で窯が造り直されたことがわかっています。1号窯には草文絵唐津皿や溝縁皿、皮鯨皿などがあり、主体的に皿類を製作しています。窯の平均規模は2.2×2.2mあり、17室以上あったことが想定されています。

2号窯は皿が若干あるものの、1号窯では見られない鉄釉壺や叩き成形の瓶を焼成しています。窯の規模は1号窯と類似しますが、室数は不明です。

3号窯は砂を使って重ね焼きする溝縁皿が主体となり、絵唐津皿はみられません。形や文様から2号窯と同様に1630年代には閉窯するものと考えられています。

①葎之本窯跡



④長葉山窯跡

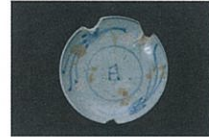


長葉山窯跡は、物原の遺物堆積状況から陶器→磁器製作への転換が認められる重要な窯跡です。特に長葉山窯は、高麗媼が元和8年(1622)に開窯したと伝えられ、発掘調査の結果とも符合します。長葉山窯を開窯した高麗媼は、唐津椎ノ峰の中里茂右衛門に嫁ぎ、製陶に励んでいましたが、夫の死後、三川内へ移転したと記録されています。

平成8・9年に行った発掘調査で2基の窯を検出し、出土遺物の観察から1号→2号窯の順に開窯していることを確認しました。

1号窯では、陶器が大半を占め、種類としては古い時期は碗・香炉・壺・片口・鉢類、新しい時期には碗・皿を作っています。

2号窯は1号窯の閉窯前後に開窯しており、物原では1号窯同様に陶器と磁器が混在しますが、最も新しい時期の最終面からは雲龍文碗がみられ、17世紀後半に閉窯したと考えられています。



地蔵平東窯は、昭和52年(1977)に発掘調査が行われており、その成果は長葉山窯と類似しています。

調査では、調査順によりA・B窯の2基の窯跡を確認しており、その重複関係からB窯が先に開窯していることがわかっています。B窯の最も下層からは溝縁皿が出土していることから、葎之本窯で焼かなくなった時期(=1630年頃)前後に開窯しています。また、同層からは有田地域の磁器(=石が原料)を模倣したと思われる陶器の圀円文皿も出土しています。その直後からは陶器と磁器が混在する層へと変化しており、出土する磁器は陶器風であるため、陶器の陶工が磁器製作の基本技術を習得して製陶していた可能性が想定されています。

B窯と重複する様に築かれたA窯の物原(=廃棄場所)の最も下面には、雲龍文見込荒磯崩碗が出土していることから、17世紀後半に閉窯したと考えられます。

②地蔵平東窯跡



⑤三川内東・西窯跡



三川内東窯は17世紀後半に開窯し、昭和12年(1937)に閉窯した窯で、全長は約120mになります。平成8・9年に発掘調査を行い、17世紀末~18世紀前半の物原から、精巧な皿や草花文八角杯、瑠璃釉碗、雲牡丹文や牡丹に蝶、見込みは雲龍文の大鉢などが出土しています。なお、同時期の長葉山窯・木原地蔵平東窯・江永古窯の出土遺物との比較から、三川内東窯の雲龍文碗を主体とする碗・皿類は、他の窯より良好なもの比率が高い傾向にあります。

18世紀前半からは三川内西窯においても遺物の出土が確認でき、三川内東窯とともに五弁花の草花文皿や草花文碗、雪持ち笹文碗などの磁器を焼成しています。その後、19世紀前半には、白磁素材を精選した薄手の杯や皿(精製磁器)を焼成しており献上品と思われる遺物が確認されています。

長葉山窯とともに三川内東窯は、御用窯(=献上品を焼く窯)として成立していますが、長葉山同様、民窯との寄り合い窯であったとされています。



江永古窯は、昭和49年(1974)にダム建設に伴い緊急調査が行われた窯であり、調査した順にA~C窯の名称が設定されています。これらの窯はほぼ同じ位置に重複して築かれており(C窯→B窯→A窯の時代順)、C窯が開窯期のものにあたります。

開窯時期は、最下層から雲龍文碗類が認められることから17世紀後半と考えられ、閉窯期のA窯では陶胎染付が主体的に出土し、18世紀末が下限とされています。その後、閉窯後は江永東窯へ移行したことが想定されている。

特にB窯では、窯焼中に崩落した状態で1室が検出されており、焼成室で出土した遺物は刷毛目の碗及び火入のみという状況が確認されている。

③江永古窯跡



⑥伝 代官所跡



寛文8年(1668)に御用窯関係の御細工所等が長葉山窯から三川内山へ移転しており、その御細工所の棟梁であった今村家屋敷が代官所と伝えられています。現在、建物の基礎石が現存していますが、これは昭和60年前後に解体した段階のものであり、江戸期には広大な土地を所有していた可能性が非常に高いといわれます。

発掘調査では、三つ葉葵文(徳川葵)の大皿片が出土しています。高台に沿う火割れ等の窯傷があるため、廃棄されたものと考えられます。文様から18世紀初頭前後の製作であり、葵の葉脈本数から將軍家への献上品であれば5代綱吉、6代家宣、7代家継へ対するものと推察されます。その他にも多くの献上されるはずだった皿類が多く見つかっています。

これらは代官所の初源期のものであり、検品後に廃棄されたものと考えられます。

